

他者の発言が批判的思考の表出判断に与える影響

○西田伍希¹・平川真²

(¹ 広島大学大学院先進理工系科学研究科・² 広島大学大学院人間社会科学研究科)

目的

多くの情報が飛び交う現代社会において、批判的思考は重要な考え方の一つとして挙げられる。他者との意見交換など日常的な対人コミュニケーションの際には、批判的に思考した後、その意見を表出するかどうかを判断する段階がある。田中・楠見 (2016) は、批判的思考の表出判断に注目し、正しい判断をするという目標が表出を促進し、楽しい雰囲気にするという目標が表出を抑制することを示した。

しかし、田中・楠見 (2016) が研究の限界点として指摘しているように、この研究では、会話の目標を教示によって外的に与えている。日常的には、発言者が自発的に定めるものであり、目標の操作方法の妥当性については疑問が残る。

そこで本研究では、目標を明示的に与えずに操作するために、他者の発言によって発言者の目標を間接的に操作し、目標が批判的思考の表出判断に与える影響を検討する。回答時の目標も測定し、間接的な操作が適切なものであったか検討する。

方法

実験計画 1 要因 3 水準（批判的でない発言/批判的発言/発言なし）の参加者間計画であった。

分析対象者 大学生 127 名（男性 53 名、女性 72 名、性別無回答 2 名；平均年齢 19.2 歳）。

手続き 田中・楠見 (2016) を参考に、架空の会話を提示し、参加者とその友人 2 人の 3 人による会話場面を想定するよう教示した。会話内容は 1 人が不適切な議論として過度の一般化を含んだ発言をし、もう 1 人がその発言に対して条件ごとに異なる発言をするものであった。条件は、批判的でない発言、批判的発言、発言なしであった。

参加者はこの会話の後に自分が行う発言を多肢選択式により選択することで、批判的思考の表出を測定した。その後、発言選択時の目標 (i.e., 正しい判断をする, 楽しい雰囲気にする) を測定した。最後に個人差変数としてセルフ・モニタリングと批判的思考態度を測定した。

倫理的配慮 著者の所属機関が設置する倫理審査委員会の承認 (HR-PSY-001360) を受けた。

結果と考察

批判的発言選択への効果 批判的発言選択の有無を目的変数、他者の発言、セルフ・モニタリング、批判的思考態度を説明変数とするロジスティック回帰分析を行った (Table 1)。その結果、他者の批判的発言の効果が認められ ($\beta = 1.61, p=.002$)、他者が批判的発言をした状況では、他者が発言しない状況に比べて批判的発言が選ばれやすいことが明らかになった。個人差変数については、セルフ・モニタリングの外向性のみ促進方向で有意な効果が認められた ($\beta=0.63, p=.038$)。

Table 1

ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	β	SE	p	OR	95%CI
状況変数					
批判的でない発言	-0.71	0.49	.144	0.49	[0.18, 1.26]
批判的発言	1.61	0.51	.002	5.00	[1.89, 14.27]
個人差変数					
批判的思考態度					
論理的思考への自覚	0.07	0.37	.853	1.07	[0.51, 2.24]
探求心	0.44	0.34	.191	1.55	[0.81, 2.07]
客観性	0.26	0.50	.607	1.29	[0.48, 3.47]
証拠の重視	-0.14	0.31	.644	0.87	[0.47, 1.59]
セルフ・モニタリング					
外向性	0.63	0.30	.038	1.87	[1.05, 3.46]
他者志向性	0.20	0.36	.582	1.22	[0.60, 2.52]
演技性	-0.25	0.26	.325	0.78	[0.46, 1.28]

他者の発言が目標に及ぼす影響 各目標の認識を従属変数、発言内容を独立変数とした、1 要因分散分析を行った。その結果、正しい判断をするという目標についてのみ、主効果が有意であった ($F(1,124) = 3.20, p = .044$)。Bonferroni 法を用いた多重比較を行った結果 ($\alpha=.05$)、正しい判断をするという目標は、批判的発言条件において批判的でない発言条件よりも意識されやすいことが明らかとなった ($t(82.94) = -2.54, p = .013$)。

引用文献

田中 優子・楠見 孝 (2016) 心理学研究, 87(1), 60-69.